

豆の木は窓のすぐそばだったので、ジャックは、窓を開けて木にとびつき、はしごみたいに登っていききました。登って、登って、登って、登って、登って、登って、とうとう空まで行きました。すると目の前に、広くて長い道がまっすぐのびていました。ジャックはその道を歩いていきました。どんどんいくと、とてつもなく大きな家につきました。入り口に大きな女の人がいきました。

「おはようございます。おばさん」と、ジャックは丁寧にあいさつしました。「朝ごはんを少しだけいただけませんか」

女の人は、

「朝ごはんだって？ここにいたら、あなたが朝ごはんになっちゃってしまうよ。うちの人は食い鬼で、男の子を焼いて食べるのが何より好きなんだ。すぐに帰ってくるよ」といきました。ジャックはゆうべごはんを食べてなかったたので、おなかがぺこぺこでした。「ああ、お願い、おばさん。何か食べさせて。昨日の朝ごはんからあと何も食べてないんです。飢え死にするくらいなら、焼かれて食べられた方がましだよ」

——「ジャックと豆の木」より

男の子は出かけました。道は遠くて、歩きに歩かなくてはなりませんでした。やっとのことで、男の子は北風の家につきました。

「こんにちは。この間はよく会いに来てくれたね」と、男の子はいいました。北風は、「やあ、こんにちは。おまえもよく会いに来てくれた。それで何の用だね」と、しわがれ声でいいました。男の子は、

「あなたが小屋の階段のところですらっていった小麦粉を返してもらいに来たのさ。うちは貧乏だから、わずかばかりの小麦粉をとられたら、飢え死にするほかないんだ」といいました。北風は、

「ああ、小麦粉はないよ。でも、そんなに困っているなら、このテーブルかけをやろう。『テーブルかけよ、広がれ。ありとあらゆるごちそうを出せ』といえ、すきな食べ物は何でも出してくれる」といいました。

——「北風に会いに行った男の子」より

とうとう娘は、世界の果てまでやってきました。お日さまのところへ行ってみると、お日さまはとても恐ろしい人で、小さな子どもをむしやむしや食べていました。そこで娘は素早く逃げだし、お月さまのところに行ってきました。すると、お月さまは、とても冷たくて意地悪な人でした。そして娘に気づくと、「くさいぞくさい、人臭い」といいました。そこで娘はお星さまたちのところへ走っていききました。お星さまは、娘に親切にしてくれました。

——「七羽のカラス」より